



いなば すがわらじんじや
稲葉の菅原神社に、えらい力持ちの神主さんがおった。
だれ すもう
誰と相撲とっても負けたことがない。口惜しがった
くちや
若い者が三人、いっぺんにかかっていったけど、てんで
歯あもたたん。三人とも目えまわしてしもた。

うちの神主さんはノミノスクネの生まれ変わりや
いうて、もう誰も相手になる者はおらんかったそうな。

夏のある日。

急に天地が暗な^{くろ}ったと思うと、ものすごい夕立^{ゆずり}がきた。
いなすまひか
ドロドロドロと雷が鳴り、稲妻^{いなずま}光り、桶^{おけ}ひっくり返したような大雨や。

神主さん、傘^{かさ}もささずに庭へ降りると、目えむいて天をにらんだ。

「雷^{あび}のやつ、今年^{ことし}はほんまによつ暴れよる。木は倒れるわ、大水は出るわ、村ん中はもうむちゃくちゃや。いっぺんとっ捕^{つか}まえてヤイトすえたらな。」



その神主さんの目の前へガラガラドッシーン！
けいだい おおあな
雷が落ちた。真っ白い砂を敷いた境内に大穴あけて、めり込んだ。

「しめた。」

神主さん、庭の大石、えいとはかりに持ち上げて穴の口^{くち}を塞^{ふさ}いでしもた。

びっくりしたのは雷や。

「こらあ、何するんやあ。石どけい！」

おおあは
大暴れに暴れたけど、大石はピクリとも動けへん。
くさうい な あやま
閉口した雷は、おんおん泣いて謝った。

「よっしゃ。堪忍^{かんにん}しちやるよって出てい。」

やっと石どけてもろた雷が、べそかきもって神主さんの前に座^{すわ}った。

「雷よ。ただでは天へ帰らせへんでえ。お前のこわしたもん、みいんな元どおりに直していけえ。俺^{わし}も手伝^{てつと}え。」

「うちやるよってなあ。」

それから神主さんと雷は、一生懸命働いた、働いた。

神かみ於の山やまからでっかい木いかついできて橋を直した。倒れた塀へいや松の木引き起こした。田んぼの畦あぜも直した。稲も起こした。そやけどお宮の石段やら石垣直すのは大変やった。崩くずれた大石一つ一つ、きっちりと積み直さんならん。夜になっても働いた。真夜中過ぎても終われへん。

「ケコッコー」

一番いちばん鶏どりが鳴き、二番ふたばん鶏どり、三番さんばん鶏どりが鳴いて、神於かみの山のてっぺんがぼうつと明るくなった頃、やっと終わった。

「雷よ、よう働いたなあ。もう済すんだよって、天へ帰ってもええでえ。」

「あかんわあ……」

雷はくたくたと地すわべたに座り込んでしもた。

「腹はらへって、腹はらへって、とても天へは帰られへん。」

そらもっともや、と神主さん、いそいそでお供そなえのお餅もち持もってきてやった。大きなお盆に山盛りのお餅や。

雷は喜んで、食たったも食たったも百個ぐらいは食たったやろ。

いざ帰るとしたら、お腹なかぱんばんで動かれへん。

「世話のやける雷やなあ。そんなら、腹はらごなしに俺わしといっちょ相撲すもうとろやないか。さあこいっ。」

神主さんと雷は、どつかあんどぶつかりあって、よしよ、よいしよ、はっけよい、ともみあったけど、やっぱり神主さんの方が強かった。虎この皮のしましまふんどしつかまえて、

「ええい！」

と空へほり投げた。雷は飛んで飛んで、やっとこさ黒雲の端はしにしがみつき、さいならーとも言わずに逃にげていってしもた。

この時、神主さんが雷を閉とじ込めた石が雷石で、今もお宮の境内けいだいに残っているんやてえ。

